OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	明治期における輸出磁器のデザインについて : オールドノリタケの薔薇を中心に
Author(s)	井谷, 善恵
Citation	デザイン理論. 2003, 42, p. 122-123
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52936
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

明治期における輸出磁器のデザインについて
── オールドノリタケの薔薇を中心に ──

井谷善恵／オックスフォード大学

「オールドノリタケ」と呼ばれた当時の森村組が主に米国向けに輸出した磁器の薔薇のデザインについて考察する。明治三十年の，手描で，金彩もほどこされた図案が集められた画帖2冊を選んだ。その中で今回特に薔薇のデザインに焦点をあてたのは，970例中，花のデザインが819例におよび，その819例の花のデザインのなかで薔薇に関連したのが397例と約半数を数えることから，薔薇がモチーフとして最重要視されていたと考えられるからである。

薔薇のデザイン中，壺に描かれたものは86枚であり，そのうち78枚はいわゆるナチュラリスティク・ペインテングと呼ばれる丁寧な技法で描かれ，そのなかでも特に15枚は非常に丁寧に描かれている。それに比べ，パターン化されたデザインはわずか8例である。大きさとしては，51例が大型の薔薇であり，それらは手の込んだデザインが多い。ぼかしが背景としてつかわれて，色彩が豊かなのも壺における薔薇のデザインの特徴である。ビーディングと呼ばれる技法や豊かな金彩が加えられているものも多数あり，薔薇自体が背景として装飾的に用いられているものも見受けられる。

このようなことから，明治期の瀬戸を中心としたアメリカ向け輸出磁器壺の特徴として，花をいけるという実際的な目的ではなく，ヨーロッパの壺同様むしろ部屋などを飾る装飾目的が主であったとおもえる。

ジャグとティーポット，コーヒーポットなど89例のデザインの特徴としてはナチュラリスティク・ペインテングの薔薇が描かれ，非常に手の込んだ6枚のデザインも含まれる。金彩も非常に豊かである。その装飾技法もカルトゥーシュ，中帯，盛り上げ，または背景の暈しなど装飾も凝ったものが多い。

ノリタケ画帖には，「画工師石田佐太郎」とされたデザインに黄色の薔薇があり，石田作としてそれ以外はすべてピンクが主である。他の絵師によって描かれた薔薇も石田同様ピンクが主流を占めている。ピンク顔料が高価であるにもかかわらず，ピンクの薔薇が中心であったというのは，参考としたヨーロッパの磁器のデザイン，仕向け地であったアメリカの顧客の両方でピンクの薔薇が好まれた結果であろうと思われる。

薔薇のデザインのうち金彩を含まないものは20例に過ぎず，まったく金彩がない，あるいは金彩の有無が特定できないのは画帖のデザインのうちで7％にすぎず，残り93％になんらかの金彩が見られる。

明治の輸出磁器とくにオールドノリタケには，いったん泥しょうで盛り上げた後金彩をほどこしたいわゆる金盛り上げといわれるものが見受けられ，特に壺，ジャグ，ポット，皿などにその技法が使われている。画帖のデザインのうち，この金盛り上げが金彩のいずれかの部分で使われているのは全体の40％ある。しかし，このような見事な金盛り上げは時代を経るにつれ，減少していく。画帖のなかには5例のアールデコタイプのデザインがあるが，ここで見られる金彩もすべて平板なタイプである。

ほぼ半分のデザインがなんらかの方法で装飾が施され，そのうち65例が非常に手の込ん

だ装飾が使われている。装飾が加わるときは豊かな金彩も施されている。

ノリタケ画帖397枚の薔薇のデザイン中，皿に描かれたものは183例である。そのうち119例がパターン化され，64例がナチュラリスティク・ペインテングの技法でそのうち25例がとくに丁寧に描かれている。

カップ＆ソーサー19例中15例がパターン化されたタイプの薔薇である。壺などに見られるようなナチュラリステック・ペインテング的デザインは5例を数えるに過ぎず，非常に手の込んだといえるデザインは全くみうけられない。薔薇の大きさは中型を主とする。それに対し現代におけるノリタケのカップ＆ソーサーのデザインは小型でパターン化された薔薇が中心で，縁のボーダー柄として配置されている。

オールドノリタケの主な仕向地であったアメリカにおいて“China cabinet”と呼ばれる食器棚がアメリカの商品カタログに最初に登場したのが1880年初頭のころとされ，そのころ中産階級のあいだに磁器のディナーセットが爆発的な勢いで浸透していった。

しかし食生活の簡略化がおこり，またファースト・フードの普及により，それ以降，食器が熱狂的に迎え入れられることはない。

このようにアメリカの食文化の歴史を振り返ったときに，森村組のアメリカ進出という時期が，販売地であったアメリカでの急速な食文化の近代化のなかで，成長したといえる。

また，アメリカで，オールドノリタケを含めた日本製の輸出磁器が輸入量を増やした理由の一つにヨーロッパ製品に比べて価格が安かったことが挙げられる。

また，当時の森村組のアメリカ重視を表す言葉として「米状神聖」ということばがある。いかにアメリカからの意見を採り入れたかということである。

しかし，明治期に輸出磁器の西洋風絵付けの中心をなした薔薇は，だんだん時代を経るにつれて，現在では磁器における花の意匠のモチーフとしてはごく一般的なものとなった。明治期に見られたような手の込んだデザインや金盛り上げ，ビーディングなどは姿を消していった。

しかし，それが大量生産の結果だけとも言い難い。当時のアメリカの磁器デザインに目を向けてみる。陶芸家であったA. Robineau（1865－1929）と夫によって1899年から25年間にわたって出版された雑誌“*Keramic Studio*”に掲載された磁器のデザインのうち，1906－28年までの主なものをC. Graftonが集めた120人のアメリカ人陶芸家によるデザインを見ると，薔薇のモチーフが使われたのは436点のデザインのうち，15点であり，ヨーロッパの伝統的デザインより簡略化されている。このようにアメリカ人が求めた，あるいはアメリカでの流行といったものが，それまでの伝統的ヨーロッパパターンから脱却して，軽いものになってきたという流行もオールドノリタケのその後のデザインに影響を及ぼしたものと思われよう。

デザインの決定方法として，初めはヨーロッパから見本を持ち帰っていたのが，明治18年以来N. Y. 意匠図案部におけるデザイン作成→それをもってセールスマンが注文をとりにいく→その注文を絵付けのために日本に送るという方針が取られた。ヨーロッパのバラを研究し，そこに装飾的な付加価値を加え，その価格を低く抑えることで，オールドノリタケはアメリカ人に受け入れられたのである。

今回は絵付けのみの考察になったが，今後さらに形状についても研究を重ねながら，それらが日本の陶磁史にどのような影響をあたえたのか，また，アメリカの陶磁史における影響を研究することを今後の課題としたい。